

高山の文化を高めた人々

17

高山の根付と 江戸で修業した彫刻師たち(1)

江黒亮一

期になって庶民から離れ、忘れられてしまった。

高山の根付彫師たち

まず江戸で生涯を終えた、平田亮朝が根付彫の始祖である。次に江黒亮春、松田亮長、広野亮直、中村亮芳、浅井一之、江黒亮忠、津田亮定、江黒亮聲、江黒亮年、津田亮則など皆故人である。

始祖平田亮朝は、若くして江戸に出て根付彫の初代山口友親の弟子となり修業、小間物問屋の日野屋のお抱え彫師となり、浅草橋近くに住み、三十八歳の若さで死去、浅草竜谷寺に葬ったと伝えられている。

その竜谷寺を、先年東京の友人の助力で、台東区寺町に探し当てたが、関東大震災と、先の戦争と二度の災厄に遭い、何の手がかりも得られず、やむを得ず供養をお願いして来た。未完ながら、遺作がわが家にある。

江戸で修業した彫師たち

当時飛騨は天領であったが、江戸往来の役人や商人によつて華やかな江戸文化が直接流入し、それを聞かされ、若者たちは、皆ひたむきに江戸に憧れ、江戸へ行く夢を抱いたのであった。

わが祖、江黒亮春(豊吉)は、天保十四年(一八四三)十二歳で平田亮朝を頼つて江戸へ出て亮朝の許で根付彫を修業、その末弟の江黒亮忠(尚吉)は、慶応三年(一八六七)十六歳の時兄亮春を頼つて江戸へ出て修業した。父浅吉が江戸通いの小商人であったので父に連れられてであつたが、高山から幾山河越えての苦難の道中に耐えて念願を

果たした。その意欲には子孫として頭が下がる。

修業を終えて帰つたのは亮忠が先で明治六年、八軒町に住み根付彫刻に専念。

後年は、尚吉の別号で一般彫刻も手がけた。代表作に桜山八幡宮の大神輿の彫刻、屋台の鳩峯車の彫刻、高根村大徳寺、郡上明方村浄光寺の欄間彫刻などがある。

亮春は晩年になつて帰り亮忠宅に同居、絵が巧みで渋草窯で絵付の仕事もしたが、独身の生涯であつた。

亮忠の長男房吉は明治三十二年上京、高村光雲、米原雲海、関野聖雲、平櫛田中等の日本木彫会の森鳳聲の門に入り、本格的に木彫の修業をして明治四十年帰る。号の亮聲は師鳳聲の聲と家系の亮を合わせたもので、仕事は根付より仏像や置物など一般彫刻が中心であつた。代表作に東山善応寺本尊釈迦如来、文殊菩薩、普賢菩薩、長崎市延命寺の薬師十二神将、荏名神社神輿の彫刻など、また現天皇生誕祝に県献上品(鶴飼舟)を製作した。

江戸で修業した彫師は、何故か江黒系だけであるのも不思議である。



三代 江黒亮忠作 根付「河童と蛤」 ドイツ リンデン美術館展示

松田亮長は平田亮朝の弟子と伝えられているが、亮長は亮朝より年長であり、江戸での二人の出会いも一年足らずで、対等の立場であつたとは考えられない。

亮長は、谷口与鹿を師とし、秀れた素質に恵まれ大成、知名度も高く、地元にも多くの根付彫の秀作を残している。旅が好きで、付知町の旧家にも作品多数が残っている。

亮長のことを詳しく知りたく、その子桃吉さんを小坂町に訪ねたのは、昭和十年頃で縁者の離れた家に老いを侘しく暮らしておられた。しかし、亮長の遺品はほとんど無く、煙草代や貸したままのもの、だましとられたものもある、と淋しく語られた。

亮長の墓が未だ所在不明で、小峰大羽氏と父亮聲が東山墓地界限を数回探したが、遂に見つけることができず、残念がつていた。